

久芳 崇（東洋史学）

十六～十七世紀東アジアにおける火器技術の伝播と普及

本論文は、十六世紀末以降における日本式鉄砲の中国への伝播、日本兵捕虜の明朝への連行、明朝における火器受容などの諸問題を包括的に論じたものである。

従来、日本における鉄砲の伝来・製造・普及については多数の研究の蓄積があり、朝鮮王朝による日本式鉄砲の導入についても検討が進んでいる。また明末中国における、宣教師を通じたヨーロッパ式大砲の導入についても多くの研究がある。しかし明末期において、日本式鉄砲が日本兵捕虜を通じて明朝に伝播し、各地の戦闘に活用されていたことについては、従来ほとんど知られていなかった。本論文はこうした未開拓の分野に対し、きわめて多くの新史料を発掘・検討して、その実態を解明したものである。

第一章では、宋代から明末清初期にいたる、中国を中心とする東アジアにおける火器の発達と普及を、多くの先行研究をふまえて総述している。中国の火器発達史の全体像を整理したのもとして、現時点では日本におけるもっとも包括的な叙述といえる。

第二章では、豊臣政権の朝鮮侵攻（明朝では朝鮮の役と称する）に際し、明軍の武将が獲得した日本軍の鉄砲が、捕虜となった日本兵とともに明軍に収容されたことを論じる。そして朝鮮の役を終結直後に四川で発生した楊応龍の乱においては、朝鮮から投入された明軍武将の下で、日本式鉄砲と日本兵捕虜が、その鎮圧に活用されたことを解明した。

第三章では、朝鮮の役において明軍の捕虜となった日本兵捕虜は、まず遼東に送致され、その一部は北京に送られたのち、長城線に沿った北辺の軍事拠点に配置されたことを示した。さらに北京での明軍の凱旋式典において行われた、日本軍捕虜の皇帝への献納儀式についても、同時代の実見記録などを活用して、その実態をはじめて明らかにした。

第四章では、中国西南部における火器普及のプロセスに検討を加えている。特に倭寇対策、朝鮮の役、楊応龍の乱などに従軍し、日本式鉄砲に習熟するとともに、京営（北京駐屯部隊）においてヨーロッパ式鉄砲の導入にも関与した武官が、西南部の火器普及に果たした役割を詳述した。

第五章では、朝鮮の役における明軍の主要武将であった劉綎をめぐり、明朝の武官統制のもとでの火器技術受容の特質を論じた。劉綎は日本人・西南少数民族・東南アジア系民族などを含む、子飼いの「家丁」兵力を擁し、こうした家丁集団が火器の製造・使用の中心となった。しかしこうした自立性の強い軍事集団も、軍糧補給を明朝の中央財政に依存しており、軍糧補給の途絶により解体するという脆弱性を免れなかったことを示した。

結論では、以上各章における考察を総括するとともに、十六世紀末以来の、明朝中国を中心とした火器技術の伝播と普及が、十七世紀以降、中国周辺部において自立的な軍事勢力が台頭するなかで進展し、明清交替をはじめとする東アジア世界の変動に重要な役割を果たしたことを指摘している。

以上のように、本論文では未紹介史料の広範な発掘と検討を通じて、日本式火器の明朝への伝播と普及という、従来の研究ではまったく見逃されていた歴史的事実を明らかにし、それを十六世紀末以降の東アジア世界の変動過程を背景として考察した、独創的な研究であると評価できる。よって本調査委員会は、本論文の提出者が、博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいと認めるものである。